

令和3年度 榛原中学校 学校経営方針



学校教育目標「こころざしを育てる」の達成を目指し、榛中教育の根幹となっている基本理念や榛中ならではの教育については、確実に継承する。令和3年度は教育課程編成会では、全職員で教育課題と課題を踏まえた育成する資質・能力を明確にし、さらに経営の重点と具体策について創意工夫をする中で、本年度の教育課程が創り上げられた。

全職員の英知を結集して創り上げた教育課程を教職員自身がその達成に向けて自分事として活動することを通して、生徒が生き生きと自分らしく、輝きながら自分のこころざしを高めることができるそんな榛原中学校を地域と連携しながら目指していく。

1 学校経営の基本姿勢

(1) 相互信頼を基盤とした学校運営

教職員と生徒、教職員と保護者、教職員相互、学校と地域の信頼関係があつてこそ、学校教育は成り立つ。

(2) 社会に開かれた教育の展開

よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創るために、どのようなことを学び、どのような生徒を育てていくのかを教育課程に明確に示し、地域と連携・協働しながら実現させていく。

(3) 主体的に学び続ける授業の推進（何はなくともまず「授業」⇒ 授業を軸とした学校経営）

学校教育の中心である授業において、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間力等」を育み、生涯にわたって学び続ける基礎を培う。

2 教育課題

(1) **すべての教育活動を学校教育目標「こころざしを育てる」に結び付ける。**

(2) **自分自身に自信がなく、自己肯定感が低い生徒がいる。**

(3) **素直で言われたことはやれるが受け身で主体性に欠ける面がある。**

(4) **多くの生徒は決められたことをしっかりやれるが、自己解決・課題解決力が足りないと思われることが見受けられる。**

(5) **人懐っこく仲間と共に活力を発揮できるが、交友関係は限定的な関わりを好む。**

3 育成する資質・能力 目指す生徒像

(1) **将来設計**：自分の特性・興味・関心から将来を考える。

夢や希望を実現する上で課題を見つけ、解決のプロセスを見い出す。

(2) **自己理解**：自分の特性を集団で役立てる。体験活動を通して自尊感情を高める。

(3) **主体性**：自分の思いや考えを実現しようとする。

(4) **判断力**：自分と周りの人や物の関係性を考え行動する。

(5) **他者理解**：多様な文化や考えを理解する。

(6) **コミュニケーション力**：他者との関わりを大切にし、お互いの個性を尊重する。

特に主体性と判断力を高めることが他の資質・能力を伸ばすことに繋がる。

よって、令和3年度は主体性・判断力を重点的に育成する資質・能力とする。

4 目指す学校像

(1) (生徒にとって) 心身ともに成長でき、友とともに夢や希望を抱ける学校

(2) (保護者にとって) 信頼できる教職員がいて、我が子の成長を促してくれる学校

(3) (地域にとって) 地域とともに創り上げられた、自慢したくなる学校

(4) (教職員にとって) やりがいがあり、所属する幸せを噛みしめたい学校

5 目指す教職員像

- (1) 「あたたかいことば」「やさしいまなざし」「ていねいなかかわり」を「チーム榛中あい言葉」として、生徒や保護者に寄り添う教職員
- (2) 自らがこころざしを持ち、よりよい榛中を創り上げるために全力を尽くす教職員
- (3) 生徒のために行動し、生徒のよさや可能性を引き出す教職員
- (4) 高い倫理観と使命感、社会性を身に付けている教職員



6 建学の精神 「自学」「共励」「鍛錬」

7 学校教育目標 「こころざしを育てる」

8 重点目標 「自分を鍛え 他を思いやる」

9 キャッチフレーズ 「榛中は未来の私の出発点」

10 キーワード 「笑顔」「ありがとう」

11 榛中ならではの特色ある教育

- (1) **ロード制の推進**…ロード集会の実施、マイロード活用
年間を集団づくり・誇りづくり・感動・学び・感謝の5つに区切り、PDCAサイクルを通して、1年間を具体的な目標（ゴール）をイメージさせて筋道を立てて取り組む。
- (2) **スタッフ制の推進**…スタッフ会、5部長会の実施
校内組織を自学部・共励部・鍛錬部・事務部・教務部の5部編成として部長を中心に各部からの具体的な提案を基にビルドアップで学校運営を推進していく。
- (3) **学年主任を中心とした学年運営の推進**…学年主任者会、こころざし育成会の実施
各学年主任が学校の中核となって学年運営を推進する。また、他学年とも適切に連携を持ちながら全体としてバランスを保つ。
- (4) **生徒主体の生徒会活動**
榛中5つの誇りにはすべて「心」が付いている。この誇りを『本物』の活動にしていこうとすることで、生徒の一層の主体性を育む。
「心つながる挨拶」「心正す服装」「心かまえる時間」「心みがく清掃」「心ひとつに合唱」
- (5) **コミュニティー・スクール導入**
 - ・学校運営協議会を発足させる。
 - ・地域人材活用による業務内容の整理…地域に任せることと学校のやるべきことの区分
 - ・学校の応援団をつくる。
- (6) **市教育委員会指定「小中連携事業」の推進**
令和3・4年度市教育委員会からの「榛原中学区での小中連携事業」を推進する。持続可能で榛中学区ならではの連携のあり方とする。
 - ・研修を中心に小中の授業を見合い合同研修を行うことを通して、それぞれの実態を知る。
 - ・今まで継続実践してきた「こころざしを語る会」を有効に活用する。

12 学校経営の重点と具現化方策

- ★本年度重点的に育成する資質・能力は「主体性」「判断力」とする。
 - * 生徒が主体性や判断力が発揮できたと感じる職員 80%
- ★すべての教育活動を通して起郷家教育「こころざしを育てる」に結び付ける。
- ★失敗を許容し、生徒に任せ行動させる場面を意図的につくり主体性を育てる。
- ★自分や自分達で決定し、行動する場面を意図的につくり判断力を育む。

(1) 生徒が粘り強く思考を続けるための授業改善の推進 【自学部・研修部】

*** 授業がわかると答える生徒 80%以上 (令和元年度は授業が楽しい)**

- ア 学習成果を的確に捉える**学習評価の在り方**を研究する。
 - ・ 榛中における3観点の評価の在り方
- イ **一人一台端末を有効に活用**した授業の在り方を追究する。
 - ・ eライブラリー、ロイロノート等を文房具として使える。
- ウ **小中相互の授業公開、合同研修会を実施**する。
 - ・ 1学期…中学校の授業公開と研修会 2学期…小学校の授業公開と研修会
 - ・ 夏季休業中の小中合同研修会実施
- エ **起郷家教育の理念を反映した総合的な学習 (DF) の在り方**を追求する。
 - ・ モジュールDFの計画と実施

(2) 生徒主体の教育活動の推進 【共励部】

*** 行事・生徒会活動へ積極的に参加したと答える生徒 95%以上(よくできている 35%以上)**

- ア **生徒が考え、創り、前面に出る行事を創造** (失敗を許容) する。
 - ・ 「目指す姿」を明確にさせ、行動意欲を高める。
 - ・ 「生徒に任せる場」と「教師が整える場」の明確化と意図的設定
- イ 5つの誇りを**「本物」の誇り**にさせる。
 - ・ 各専門委員会で連携させ、課題解決を図る。
 - ・ 誇りアンケートを実施し、「見える化 (数値) 」を目指す。
- ウ **持続可能な部活動の在り方**を検討する。
 - ・ 外部で活動している者の位置付け…外部での活動を認める。
 - ・ 部活動指導員への橋渡し…優先順位を決め、予算化された人員を有効に活用する。
 - ・ 外部機関との連携による部活動数 (顧問数) の精選
- エ 各活動、行事等の反省評価を生かした、次年度プランの策定。

(3) 信頼に応え、地域の誇りとなる学校づくり 【鍛錬部】

*** 学校が楽しいと答える生徒 90%以上 (令和2年度 81%)**

- ア 情報共有・組織対応・早期対応を実施する。
- イ 規範意識や他者意識を持たせ、自治自浄力のある集団づくりをする。
- ウ 判断力を育む学校生活とする。
- エ 自己肯定感を高め、主体的に活動する態度を育む関わりをする。

(4) やりがい、働きがいのある学校づくり

*** 働きがいがあると答える教職員 80%以上 (令和2年度 70%)**

- ア 教職員誰もが経営参画しやすい体制をつくる。
- イ コミュニティ・スクールの組織確立と地域と連携した活動を推進する。
- ウ 持続可能な小中連携のあり方を自学・研修部と連携して推進する。
- エ 各種たよりやHP、報道などを積極的に活用して情報発信をする。
- オ 教育の質を高めるための学校の働き方改革を研究する。
 - ・ 各自が勤務状況を把握できるシステムの構築
 - ・ 提出物等のデジタル化
 - ・ 外部人材の有効活用
 - ・ 部活動の在り方
- カ 組織を活かした教育支援を行う共同学校事務室を運営する。

学校教育目標・重点目標等に込めた思い

1 建学の精神

自学 共励 鍛錬

昭和46年、川崎中、勝間田中、坂部中が名目統合し、現在の榛原中学校が生まれた。同48年に校舎が完成して、7月23日、現在の校舎に入校して、名実ともに榛原中学校の教育活動が現在のような状況になった。翌49年の教育目標は、「自ら工夫し学びとる生徒」「助け合いみがき合って伸びる生徒」「進んでからだを鍛える生徒」となった。

後に(昭和55年度)教育目標は、「たくましい榛中生」となったが、開校当初の教育目標を端的に表すことばとして、「自学」「共励」「鍛錬」が、建学の精神として受け継がれることとなって現在に至っている。昭和60年度の卒業記念として、当時の榛原町山本教育長の筆になる額が体育館に掲げられ(現在は会議室)、平成2年度の創立20周年記念行事の一つとして、前庭に石碑が建てられている。

自学 共励 鍛錬 は榛原中のよりどころとなる言葉である。本校において、学習指導の分掌部を「自学部」、特別活動の分掌部を「共励部」、生徒指導の分掌部を「鍛錬部」と称する所以である。

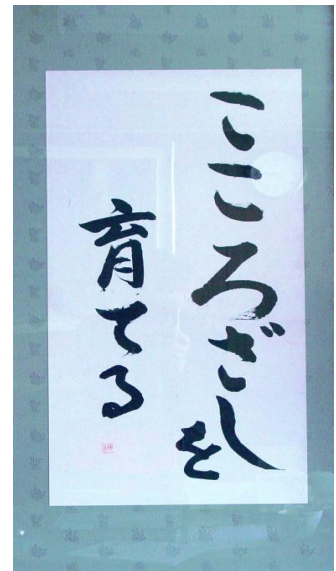


2 学校教育目標

こころざしを育てる

昭和55年度から続いていた教育目標「たくましい榛中生」が、平成13年から「こころざしを育てる」と改められた。これは翌年県教委から発行された人づくり2010プランの学校教育の項にとりいれている「こころざしをはぐくむ学校教育」の趣旨を先取りしたものであると考えられる。「こころざしを育てる」、ときくと、一見教職員の目標のようにも感じるが、敢えて学校教育目標に「育てる」と掲げられている意味は、親が子どものこころざしを育てる、榛中の教職員が生徒のこころざしを育てると同時に、生徒自身が自らの中に自らのこころざしを育てるという、まさに生徒主体の榛中教育でありたいという願いが込められている。

県教委では、人づくりアクションプランにおいて「有徳の人」づくりを目指しているが、①自らの資質・能力を伸長し、個人として自立した人 ②多様な生き方や価値観を認め、人との関わり合いを大切にする人 ③社会の一員として、よりよい社会づくりに参画し、行動する人 という有徳の人に近づくためには、若い時こそ「こころざしを立て」日々の学習にはげむことが求められる。その意味で、本校の教育目標は静岡県教育の基本目標にも合致している。令和3年度育成する資質・能力の将来設計の力はまさに「こころざしを育てる」に結び付くものである。すべての教育活動を通して常に「こころざし」を意識して教育実践をしていく。



ちなみに、幕末の志士、思想家、越前国福井藩藩士、橋本佐内が15歳にして著した「啓発録」に、志とは「心のゆく所にして、我こころの向ひ趣き候処をいふ」とある。

3 重点目標

自分と鍛え 他を思いやる

平成24年度から28年度までの重点目標は、「きこう考えよう 行動しよう」であった。

平成29年度に向けた教育課程編成における協議の中で、友達同士の些細な言動を必要以上に気にして、落ち込んで人間関係を損なうなど、精神的に脆弱と感じられる生徒が多いことや、登下校を家人に頼る生徒が多く、どこか他に頼りがちな姿勢が感じられるという課題が指摘された。生徒が自分の弱さに打ち勝ち、よい意味での「強さ」を自ら身に付けよう

という意識を持って学校生活に取り組むとともに、自分を育ててくれる身の回りの人やこと、ものへの存在に気づき、感謝の思いと同時に、他のために自らの力を尽くすという気持を持って欲しいという願いを込め、平成29年度から重点目標を「自分を鍛え 他を思いやる」とした。

重点目標を「自分を鍛え 他を思いやる」として4年が経過した。令和3年度の教育課程編成作業において、榛原中学校の教育課題ならびに、育成したい資質・能力を明確した。そこで出された教育課題を受け、育成したい資質・能力は将来設計、自己理解、主体性、判断力、他者理解、コミュニケーション能力の6点と押さえた。そして、令和3年度はまず個の力を伸ばすために生徒の主体性・判断力を育てることを最優先させるとともに、高まった個の資質能力を生かして他者理解やコミュニケーション能力の育成に結び付けていくことを確認した。このことは、まさに自分を鍛え（主体性・判断力の育成）他を思いやる（他者理解・コミュニケーション能力の育成）につながるものと捉え、令和3年度も「自分を鍛え 他を思いやる」という重点目標を継続し、すべての教育活動において意識して取り組んでいくこととする。



4 キャッチフレーズ 榛中は未来の私の出発点

生徒たちは、毎日の学校生活の中でいつも将来を意識しているわけではない。しかし、日々の学校生活の積み重ねが現在の自分をあらしめていると、後になって分かることは多い。時に生徒は、「3年生になったら頑張る」とか「高校へ行ったら頑張る」などと言うことがある。しかし「今」を大切に、今頑張れない者が心を入れ替えて心機一転などというのはかなりの困難を伴うことだ。榛中での毎日の努力が自分の未来を開くことに直結しているのだという意識を持たせたいものである。こころざしを立て、目標に向かって努力するということは、まさしく「未来」を拓くことに他ならない。未来を拓くためには今を整えることが必要なのだ。教育の営みは、すぐに結果が見えるものではないが、子どもたちが希望に満ちた未来を生きていくとき、榛中で学びや生活、私たち榛中職員が一生懸命取り組んだことが、どこかで少しでも役に立っていてくれたら、それが私たちのこの上ない喜びである。榛中でのその時その時の学びは、「未来の私」に向かう希望に満ちた出発点である。

5 キーワード 笑顔 ありがとう

子どもたちはもとより、教職員も含めて、榛中で生活するすべての人が互いに感謝の気持ちを持ちながら、清々しい日々になるよう、キーワードとして、「笑顔」「ありがとう」を掲げ、折に触れて呼びかけ合っている。

